

我が国のスポーツ指導における指導者と選手の関係についての一考察

～大松博文と「東洋の魔女」に着目して～

A study of relationship between the coach and athlete in our country's coaching system.

～Focus on Hirobumi Daimatsu and “Oriental witches”～

1K08B066-1

工藤 将太郎

指導教員 主査 友添秀則先生 副査 堀野博幸先生

【動機・目的】

今日、指導者の選手への体罰・暴力問題はあとを絶たない。先日大阪の市立高校男子バレーボール部で顧問をしていた男性教諭が部員6人に対し体罰を繰り返していたことが部員のつけていたメモによって発覚し、停職3か月の懲戒免職となった。このような体罰・暴力問題の原因を考える上で指導者と選手の関係について今一度考え直すべきではないだろうか。我が国においてコーチという存在が確立されたのは1964年の東京オリンピックだと考えられ、この東京オリンピックの象徴とも言えるのが「東洋の魔女」と呼ばれた日紡貝塚女子バレーボールチームである。当時、日紡貝塚の監督を務めていた大松博文と、選手である「東洋の魔女」たちとの特異な関係が現在の指導者と選手の関係に大きく影響しているのではないかと考える。

指導者と選手との関係構造にはどのような問題性が内在しているのか、その一端を明らかにするために本研究では大松博文と「東洋の魔女」たちとの関係を明らかにし今後の「指導者」と「選手」の関係について考察する。

【方法】

本研究は大松博文、「東洋の魔女」に関連する新聞、雑誌記事から彼らの伝記、手記などを分析の対象とする文献研究とし、バレーボールに限定する。

【第1章】

第1章では我が国にコーチ制度ができた背景、制度の内容、当時の課題など東京オリンピック選手強化対策本部報告書をもとに明らかにし、また、大松博文の生い立ちや日紡貝塚の監督になった経緯を明らかにした。大松博文の「東洋の魔女」たちに対する指導は彼の生い立ち、戦争経験が関わっていることが明らかになった。

【第2章】

第2章では「東洋の魔女」と呼ばれた日紡貝塚女子バ

レーボールチームの歴史、選手たちの生い立ち、指導の内容を明らかにした。欧米諸国に比べ身体的に劣っていた彼女たちが世界一まで登りつめることができたのは「ハードトレーニング」と言われていた大松博文の指導があったからである。また、世界選手権で優勝し世界一になった後、東京オリンピックを目指すにあたって監督、選手それぞれに葛藤があったことも明らかになった。

【第3章】

第3章では第1節から第2節にかけて大松博文の世間からの評価、選手たちとの関係について明らかにした。第3節では指導者の役割、選手の役割、コーチングとティーチングの違い、「コーチング回路」について明らかにした。仕方を教え、訓練し、目標へとリードするコーチングという一連の行為を1つのプロセスとして考え、そのプロセスを「コーチング回路」としたのである。また、この「コーチング回路」における「哲学」の段階で指導者の意図や価値は非常に重要であり、この意図や価値を喪失すると「コーチング回路」は暴走してしまう。

【結章】

我が国のスポーツ指導における「指導者」と「選手」の関係について第1章から第3章にかけて述べたことを踏まえた上で考察し、今後の「指導者」と「選手」の関係について提言を述べた。「東洋の魔女」たちはアマチュアスポーツの選手であり一社会人でもあるため、平日は朝8時30分から16時まで仕事をしている。今日、問題となっている部活動の選手も一学生であり平日の昼間は社会人が仕事している時間は勉強をしている。このように考えると両者の条件はほぼ同じである。では、なぜ暴力問題が起きるのだろうか。それはやはり「哲学」の段階における意図や価値の違いであろう。この「哲学」の段階における意図や価値を忘れ、勝つことが全てだと「計画」し「組織化」・「経営」するから問題が起きるのである。今後の指導者と選手の関係は指導者の原点や、根本にある「哲学」が重要なのではないだろうか。